



HART Newsletter

Vol.7
2002.1

〒730-0051 広島市中区大手町5丁目7番10号
アクシズビル3F TEL 082-244-3866
FAX 082-244-3864
URL : <http://www.enjoy.ne.jp/~hart/>
E-mail : hart@enjoy.ne.jp

「患者が安全な治療を選択し受けられることを国は保障すべきです」 濠州不妊患者団体代表サンドラ・K・ディルさんと HARTスタッフ、日本患者団体代表との意見交換会



第19回日本受精床学会(2001年7月、横浜市)に続いて開催された国際シンポジウム“わが国の生殖医療を考える”(HART Newsletter Vol.6参照)での講演のために来日されたオーストラリアの不妊患者団体代表、サンドラ・K・ディルさん(左写真)と日本の不妊患者自助グループである“フィンレージの会”“キッズレスパーティ”のメンバーとの討論会を広島HARTクリニック高橋院長が企画し、明治学院大学助教授柘植あづみ先生の賛同で7月11日明治学院大学で開催しました。広島、大阪、東京HARTクリニックの看護婦、カウンセラーも出席し、同時通訳の下でディルさんの活動の軌跡を聞き、日本の現状をメンバーの方が説明し、日豪の医療や文化の違いなど熱心な討論が3時間続きました。ディルさん達はヨーロッパの不妊患者団体とも定期的に交流しており、今後日本のグループとも交流したいとのことでした。この時の様子は「赤ちゃんがほしい Vol.9」(主婦の友社)に紹介されました。広島の吉岡千代美看護婦長からの報告です。

ディルさんにお会いして 広島HARTクリニック看護婦長 吉岡千代美

会はずまず自己紹介から始まりました。日本のサポートグループより、各グループの理念と活動内容について発表があり、次にディルさんからオーストラリアにおけるこれまでの活動の歴史についてお話されました。15年ほど前、不妊について語られることがタブーであった時代から、現在のように不妊症治療の全てを国に保険の適応として認めさせるまでの道のりは並大抵の努力ではなかったことを活動されたご本人から伺い、圧倒される思いがしました。

当初1人の不妊症患者であったディルさんは、不妊の経験を患者同士が共有することにより孤立感、孤独感を軽減すると確信し活動を始められ、現在ではディルさんが代表を務める「ACCESS(アクセス)オーストラリア」は3,500名の会員を持ち、その80%がARTを受けているそうです。実際に治療を受けている人の意見を交換したり、クリニックの情報などのコミュニケーションをeメールなどを通じて活発に行っておられます。

ディルさんはこれまで、不妊で悩む患者が、①安全な治療が受けられる、②治療の選択肢がある、③国による医療保険制度に基づく保障がされる、ということについて政府と交渉してこられました。これからも政府、官僚、メディア、そして医療機関に対して不妊患者の立場を尊重すべく活動を続けていかれることでしょう。そして政府との権利獲得までの活動の中で、不妊の人の顔を人の顔としてみることに、直接会って話すことの重要性、不妊の人を社会の隅に追いやってはならないということを熱く語られたことがとても印象的でした。

また、日本のサポートグループからの意



見で、あらためて医療者側からの情報提供の必要性を再認識しました。患者が求めた時に必要かつ十分な情報が提供される窓口があるべきだと感じます。現在患者の大きな負担となっている治療費の保険適用については、フィンレージの会より「保険適用となることで患者が治療を受けざるを得ない状況に追い込まれるのではないか」という質問がありましたが、ディルさんは、「治療を受けるか受けないかは個人の選択であり、選択できる状況が女性に力を与える」と意思決定権の重要性を説明されました。

日本の女性は、というより日本人はどちらかというと医師の指示に従って治療を受ける、悪く言えば医師任せにしてしまう傾向があるとよく指摘されます。また、日本では生殖医療に携わる医師のレベルが一定していないため、患者はどの病院、医師がよいのかわかりにくいという状況もあります。今後は開かれた医療の中で、患者が自

分の望んだ治療が納得して受けられるように患者と医療者の双方がもっと力を合わせて進んでいかなければならないことを強く感じました。

なお、ACCESSはヨーロッパの患者グループと共同で、毎年行われるヨーロッパ生殖医学学会(ESHRE)の期間中にICSI(International Consumer Support for Infertility)という国際シンポジウムを開催しています。ESHREに参加している世界中の医師や研究者の中から、各国の患者グループの希望に添って講師を選びシンポジウムに参加してもらおうそうです。2002年はオーストラリアのウィーンで行われる予定で、ディルさんは日本からの参加も呼びかけておられました。

【各団体の連絡先】

ACCESS <http://www.accessorg.au/>

ICSI <http://www.icsi.ws/>

ハワイで胚盤胞凍結法を指導 — 向田副院長、HART技師スタッフ — アメリカの不妊症専門医師やエンブリオロジストに —

米国で不妊症に携わっている医師やエンブリオロジスト(胚を扱う技術者)の教育や資格取得を目的として毎年行われている研究会が2001年は8月4日から7日までハワイ州のハワイ島で開かれました。本年は「ART Odyssey」と称して開催され、世界で初めて細胞質内精子注入法(ICSI)に成功したPalermo医師や着床前診断の分野での第一人者であるMunne先生らの講演の後に、広島HARTクリニックの向田副院長が胚盤胞のガラス化凍結法についての講演を行い、中村早苗主任技師と真木美紀技師が参加者に実地指導を行いました。すでにHART Newsletterでお知らせしたように、この方法は国際的にも注目されており、今回の実地指導については昨年からの開催要望があり実現したものです。今回の反響が大きかったため、早速2002年4月にアメリカで行われる生殖医学のシンポジウムの教育講演にも招へいされています。

2001: An ART Odysseyに参加して 広島HARTクリニック主任技師 中村早苗



2001年8月4~7日、ハワイでART Odysseyという研究会があり、主催者側より向田先生と共に胚盤胞凍結のワークショップ開催の要請があり参加しました。大きな研究会ではありませんが、世界で初めてICSIに成功したGianpiero Palermo先生や、卵を培養する時に使う培養液を作ったPatrick Quinn先生など、この分野で有名な人がたくさん参加しており驚きました。

研究会は3日間ありましたが、毎日朝の8時から約1時間ずつテーマの違う講演を聞き、昼食をとりながらもまた小さな講演があり、その後も午後2時まで30分位の講演をいくつか聞くといったものでした。午前中は集中したハードスケジュールですが、午後は2時で終わるため、後はゆったりと有意義(?)に過ごせました。日本でも、このようにゆっくりと時間をとった研究会があればいいのと思います。最終日にはよいよワークショップがあり、向田先生が説明されている横でデモンストレーションをしたり、実際に参加者に教えたりと、長いはずの3時間はあっという間に終わってしまいました。

これまで日本でも3回ほどワークショップを行いました。今回はリハーサルの時間も無く、また世界をリードする科学者達を前にしてのデモンストレーションだったためこれまで一番緊張しました。しかし和やかな現場の雰囲気にも救われ、非常に貴重な経験ができ、得るものが多い研究会となりました。

第57回アメリカ生殖医学会で発表、大きな反響 — 向田副院長

2001年10月20日から25日にかけてフロリダ州オーランドにおいて開催されたアメリカ生殖医学会(ASRM)は、直前のテロや関連事件にもかかわらず活気のあるものでした。広島HARTクリニックの向田副院長は、世界に先駆け同院で臨床応用している急速ガラス化法(Ultrarapid Vitrification with cryoloop)という技術を用いた胚盤胞の保存・融解後胚移植の臨床成績を発表しました。その反響は大きく、多くの医師や科学者からコメント、質問を受けました。またこの内容はすでに、アメリカの不妊専門医学雑誌Fertility and Sterilityの2001年9月号に掲載されました。

ASRM参加&アメリカ訪問記

広島HARTクリニック副院長 向田哲規

不妊症に携わっている医師にとって一番教育的で意義のある学会であるアメリカ生殖医学会が、今年はフロリダ州オーランドで開催されました。今回の学会開催時期は、ちょうど皆さんも御存じのように同時多発テロの影響で多くの日本人を含め参加者が海外渡航、特に渡米を恐れる状況でありましたが、私はHARTグループが世界に先駆けて臨床的に確立した胚盤胞の急速ガラス化保存の成績を発表することになっていましたので参加しました。同時多発テロが発生してまだ1カ月という時だったので空港の待合室は閑散としており、ほとんど乗客は乗っておらず、4人だけの椅子を1人で使ってもまだ余る状態でした。まずはじめに私が5年間住んでいたニュージャージー州ニューアークに着きました。なぜマンハッタンに接するニュージャージーに行ったかという、まだ若かった頃不妊症の勉強をするために住んでいた際、いつも自由の女神と並んで見ていたあの世界貿易センタービルがなくなってしまったマンハッタン、ダウントウンはどのように見えるのかを自分の目で確かめたかったからです。ニュージャージーでは以前勤めていたDiamond Instituteでアメリカの不妊症最前線について意見交換をし、また世界的に有名でトップレベルにあるセントバルナバスのコーエン博士の研究所にも訪ねていきました。着床前診断や卵の質的改善のための細胞質注入などの画期的な治療を世界に先駆け行っていました。紅葉が広がる町並みを懐かしく思いながら数日間滞在し、学会参加のためオーランドへ向かいました。ニュージャージーでは朝晩の気温は摂氏10度以下で、緯度になると青森から函館と同じなので広島と比べると1カ月ほど寒い感じがしましたが、フロリダ州にあるオーランドは亜熱帯性気候なので、毎日27~28度近くになり十分泳ぐことができました。

学会は例年と同じように教育的内容が多い卒業教育プログラムが2日間あり、その後不妊症治療の最先端技術に関する教育講演や口頭発表、ポスター発表になりました。学会の内容で興味深いものとしては、次のようなものがありました。



世界で初めて体外受精を成功させたエトワーズ博士と談笑する向田先生



- (1) 排卵を抑制し採卵に向ける薬剤で従来は点鼻薬として比較的長期に使っていたGnRHアゴニスト(ナサニール・スプレキア)の代わりに、現在HARTクリニックでも使っているGnRHアンタゴニストと呼ばれる新しい薬剤の臨床的有効性に関する論議。
- (2) 胚を移植する手技をいかに確立し、妊娠率を高めるかについての論議。
- (3) 卵の質を改善するためにミトコンドリアなどの細胞質成分を注入したり、核だけを取り除き良質卵の細胞質内に入れるなど、細胞工学の技術を駆使した先端不妊症治療に関する論議。
- (4) 胚盤胞移植の有効性をより高めるための論議。

【お知らせ】11月8日付新聞記事について

11月8日付の日本経済新聞、また翌日の各紙において、広島HARTクリニックが米国での卵子提供による体外受精を提携先クリニックで行うという趣旨の記事が掲載されました。この記事について高橋克彦院長より補足があります。

現在HARTクリニックを受診されている患者さんの約2割は、自身の卵がほとんど無いか、採卵しても赤ちゃんとなるような良質の卵ができない人です。残念ながらこのような患者さんが将来自分の赤ちゃんを生むことは、まず不可能です。つまり諦めるしかないのですが、このような人のために、皆さんも御存じのように欧米先進国では第三者からの提供卵子による体外受精・胚移植(D-IVF)が約15年前から行われています。しかしわが国では体外受精は夫婦間のみでという日本産科婦人科学会の会告によって行われてきませんでした。しかし厚生科学審議会の先端医療技術評価部会では、条件が満たされればD-IVFを国内で行ってもよいのではないかと報告書が出され(2000年12月)、学会も認める方向で条件などを審議しています。いずれD-IVFが国内でも可能になるのは間違いありませんが、現在40歳を越える人がその機会を待っても、早くて2年、運良くすぐ妊娠しても出産時は40代半ばになります。しかし卵子提供者が国内の規制の中でそんなに現れるとは期待できません。したがって、HARTクリニックの治療を受けても卵の原因で妊娠できない患者さんで、40歳を超えており、D-IVFをしてでも赤ちゃんを希望している人には信頼できる米国カリフォルニアのクリニックを紹介し、実施するにあたっては準備や移植後のケアはすべてHARTクリニックで行い、患者さんの負担をできるだけ軽くしています。その結果、すでに6人中5人が妊娠され、1人が出産されているということをお2001年8月に日経新聞社の記者に話しました。新聞記事はいつもスペースが足りないという理由で内容の一部が省略され、本来意図している内容が伝わらないことが多いので誤解を生じることがあります。

富山先生、米・豪の施設を視察

2001年6月～7月にかけて、大阪HARTクリニックの富山達大院長がアメリカ、オーストラリアの不妊症治療施設を視察・研修されました。両国の不妊症治療の最前線を実際に肌で感じた富山先生に報告してもらいました。

【アメリカ編】

2001年6月2日から10日までアメリカ東海岸(ニューヨーク・マンハッタン/ニュージャージー)に滞在し、次の4つの有名な不妊センターを訪問してきました。

①Cornell University Medical Center ②Saint Barnabas ③Reproductive Medicine Associates of NJ (Morristown) ④Diamond Institute

①は体外受精の分野では有名なLucinda Veeck先生とParelmo医師が活躍しており、②はドナー細胞質注入法を行って最近話題になったJacque Cohen先生がラボを管理しています。③は最近頭角を現してきたRichard Scott医師が組織しており、④は広島県の向田先生が働いておられたクリニックです。どの施設もそれぞれ持ち味があり、色々創意工夫を凝らしていました。またアカデミックなバックグラウンドを持ちながらそれを実際の臨床に生かすつ年間1,000例以上の体外受精をこなしていました。年間1,000例以上の採卵をこなすためにどれだけのスタッフと設備が必要かには驚かされます。どの施設も世界のトップレベルの成績と高い質の施設運営を行っており、見習うべきところも多かったです。それに比べ日本の現状は体外受精の採卵数が多いだけで決して高い質の施設運営をしていなかったり、逆に年間採卵数が非常に少なく、質が保てないと考えられるクリニックが多く、この点で大きく違っており、それらはすべて人間の考え方・システムの違いだと思います。



Cornell大学のLucinda Veeck先生と

【オーストラリア編】

7月21日から29日までオーストラリアのメルボルンに滞在し、次の2つの有名な不妊センターを訪問してきました。

① Royal women's Hospital ② Monash IVF

今回訪問した2つの不妊施設は世界で2番目に体外受精を成功させたグループです。約20年前に世界で初めて体外受精に成功したイギリスのBourn Hall Clinicと競争をしていました。今回私が訪問したRoyal Women's Hospitalには当時使用していた培養器が今でも置いてあり、正確に温度を保つ事は出来なくなりましたが器具の保温に使われていました。当時の人々もまだ働いており、20年とはいえ体外受精の歴史を感じさせられました。ただ、オーストラリアは法律の規制が厳しく、システムが固定化しており、同国の特性もありますが、歴史があるが故の問題点も感じられました。

6月に訪問したニューヨークと今回のオーストラリアそして日本を比べた場合、人種・歴史・価値観等により体外受精も様々に影響を受けているのを実感しました。世界を見れば見るほど色々な価値観がある事を尊重し、様々な事を受け入れる幅を持つ事が必要だと改めて認識させられます。今回のアメリカ・オーストラリア訪問を糧として、未来のHARTクリニックを考えていこうと思います。



Royal Women's HospitalのH.Bourne先生、Melbourne IVFのD.Edgar先生らと

大阪HARTクリニックを開院後4年と半年が過ぎました。どのようなクリニックが理想かを絶えず考えながら今日まで来ました。7年前にニューヨークを訪問した時の驚きと今回私が受けた驚きとはかなり質の違うものがあり、体外受精そのものの技術に関しては追いついた感があります。いや、もしかしたら我々の方が先を歩んでいるかもしれません。しかし、世界の最高水準の施設を訪問する事は非常に意義深く、色々な意味で学ぶべき所は多いです。高橋先生を中心にHARTクリニックが目指す理想の不妊施設とは何かを絶えず模索しながら、大阪HARTクリニックは開院5周年をその節目として迎えようと思います。

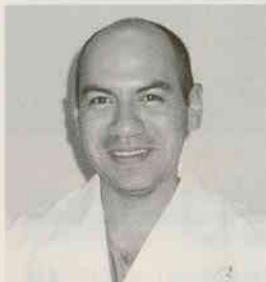
[NEW FACE!]

後藤哲也（ごとうてつや）医師、東京HARTクリニックに赴任



2002年2月より新たに後藤哲也先生がHARTクリニックの一員として不妊症治療に加わることになりましたのでお知らせします。後藤先生は三重県桑名市出身、1991年東京大学医学部卒業、すぐに同大学産婦人科研修医となり、1993年より米国ウィスコンシン大学産婦人科フェロー、1994年より4年間英国ロンドン大学大学院にて卵の発生・分化・成熟についての研究をされ博士課程修了(Ph.D取得)、1年間同大学産婦人科フェローの後、2000年より2年間オーストラリアのモナシュ大学生殖発生学研究所で研究を続けられました。先生は1992年広島HARTクリニックがわが国初の精子注入法による顕微授精(SUZI)の妊娠に成功した時来院され、技術を勉強されました。その後も高橋院長との関係が続き、ロンドン大学、モナシュ大学の研究についても助言などを受けていました。今度は不妊症専門医を目指して臨床に携わることになりますが、後藤先生の加入により、これまで以上にHARTクリニックの研究結果が世界から注目されることが期待されます。

ペルーより日系医師、 ルイス・ヴァルガス・富永先生研修のため来院



2001年9月より12月まで、東京および広島HARTクリニックで体外受精を中心とした生殖医療の研修をされました。富永先生は36歳、母方祖父が日本人で山口県出身だそうです。南米ペルーのクスコ市の産婦人科医で、1996年に日本国際協力事業団(JICA)の研修医として慶応大学産婦人科で研修した際広島HARTクリニックを見学され、大学病院以上の技術レベルに驚き、その印象が強烈であったため、再度JICAの援助で来日されました。この3ヶ月間、東京HARTクリニック岡院長より体外受精のための卵巣刺激法、採卵法、胚移植法などを学び、吉野主任技師よりラボの基本的な知識や技術を習得されました。先生は日本語、英語、スペイン語を縦横無尽に駆使してスタッフとの意思疎通を図り、スタッフは皆、まさにラテン系の先生と楽しい時間を過ごすことができました。富永先生は帰国に際して、「近い将来ペルーにもHARTクリニックを作るという大きな夢ができました」と嬉しそうに語られました。

厚生科学審議会 生殖補助医療部会の動向について 広島HARTクリニック カウンセラー 平山史朗

前回のNewsletterでもお知らせした通り、わが国における非配偶者間の生殖医療のあり方を考えるための議論が2001年7月より始まりました。厚生科学審議会の中の生殖補助医療部会においてこれまで(2001年12月現在)に8回の会合が開かれました。委員として参加している広島の平山カウンセラーが現在までの議論の様子について御紹介します。

まず、非配偶者間の生殖補助医療について簡単に説明致します。表に夫婦以外の人に関わる生殖についてまとめました。これまでわが国で実施されてきたのは、提供精子による人工授精(AID)(表の①)のみでした。そこで、これ以外の方法、提供精子による体外受精(②)、提供卵子による体外受精(③)、胚の提供による体外受精(④)、代理懐胎(ホスト・マザー⑤ならびにサロゲシー⑥)のそれぞれについての実施の是非や対象、基準などについて討議がすすまられています。

これまでは主にそれぞれの方法の是非とその対象について話し合ってきました。そして、①～④までの治療の実施を認める方向でまとまっています。ただし、⑤と⑥の代理懐胎については、代理母となる女性の負担が大きい等の理由から禁止されることになりそうです。

提供を受けられる方の条件としては、原則として配偶子を全く持たない人(女性であれば早発卵巣不全や卵巣切除を受け卵子のない人、男性であれば無精子症の人など)のみとかなり厳しい基準となっています。また、卵子提供を受けられる女性の年齢は出産後の子育ての負担等を考慮して50歳程度までと制限されています。

提供者は匿名の第三者であることが原則ですが、提供者が見つからない場合に兄弟姉妹等からの提供を認めるかどうかについてはまだ結論が出ておらず、これから激しい議論となりそうな問題です。また商業主義を排除するために金銭の授受は禁止されます。

もう一点本部会で強調されているのが「生まれてくる子の福祉」の観点で、このことから将来生まれた子に自分の出自を知る権利を認める方向で議論が進んでいます。

毎回議論が白熱し、なかなか決定事項が増えていかないのですが、私をはじめ各委員とも真剣にこの問題に取り組んでいます。

なお、詳しいことは厚生労働省ホームページの中の「審議会など」から、「厚生科学審議会」→「生殖補助医療部会」の箇所に議事録が公開されています(アドレス<http://www.mhlw.go.jp/shingi/kousei.html#k-seisyoku>)。また本部会は広く国民からの意見を募集していたり傍聴が可能であるなど、できるだけ開かれた議論を目指しています。患者の皆さんも関心を持って見守っていただければと思います。次号以降も続けて報告致します。

		精子	卵子	子宮	妊娠の方法
	通常の生殖	夫	妻	妻	自然妊娠
非配偶者間生殖医療	①提供精子による人工授精(AID)	提供者	妻	妻	人工授精
	②提供精子による体外受精	提供者	妻	妻	体外受精
	③提供卵子による体外受精	夫	提供者	妻	体外受精
	④提供胚による体外受精	提供者	提供者	妻	体外受精
代理懐胎	⑤いわゆる「借り腹」(ホスト・マザー)	夫	妻	代理母	体外受精
	⑥いわゆる「代理母」(サロゲシー)	夫	代理母	代理母	人工授精または体外受精
		夫	提供者	代理母	体外受精
		提供者	妻	代理母	体外受精
		提供者	提供者	代理母	体外受精